

応用研究論文

## 秋田県立大学における「あきた地域学」の挑戦

### 地域に根ざした大学を目指して

荒樋豊<sup>1</sup>, 山口邦雄<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科

<sup>2</sup> 秋田県立大学システム科学技術学部建築環境システム学科

本稿は、秋田県立大学において取り組まれている、あきた地域学課程について紹介するものである。特に、そのなかで 2017（平成 29）年 4 月から開講された新設科目「あきた地域学」（1 年次教育として全学必修の科目）の活動記録である。この教科の教育目標は、学生が日常を過ごす地域に目を向け、地方ないし地域社会が抱える現代的な課題群への問題関心を高めることである。そのため、担当教師による一方的な情報提供という従来の授業を止め、履修学生による主体的な学び場の創出を目指して、次の 3 つの要素によって構成する。第一に地域問題に詳しい専門家等（外部講師）による講義、第二に地方自治体等と連携した学生によるフィールドワークの実践、そして第三に現地研修を踏まえた、学生による地域活性化計画の構想（ワークショップ）である。2017（平成 29）年度の実践は、地域に対する学生の気づきを促し、総じて教育的効果を得るものであったと考えられる。ただ、次年度以降の改善に向けた各種の課題を見出すことにもなった。

**キーワード：**あきた地域学、あきた地域学課程、外部講師、フィールドワーク、ワークショップ、COC+

昨今、大学改革の動きが盛んになってきている。その動きの背景を探れば、1984（昭和 59）年の臨時教育審議会の設置に始まり、1991（平成 3）年の「大学教育の改善について」答申、そして 2001（平成 13）年の「遠山プラン」に遡ることができよう。高等教育機関として大学を時代に即してどのように位置づけ、どのような人材育成を目指すのかという問題意識が内在している。最近の政策的な動きとして、現代 GP、グローバル COE、COC などの事業が展開されている。

秋田県立大学では、学長のリーダーシップのもとに、「秋田県立大学将来構想の教育に関する検討指針」において、「秋田県の実情を知り問題点を明らかにしてその解決策を考える地域関連の講義・実習を全学の教育に取り入れて、秋田県が直面する問題を題材にして、問題発見、課題解決能力を育む」ことを掲げている。研究と教育にとどまら

ず、地域への貢献を視野においた教育体制が本学の特徴である。

この地方・地域への関与の側面を強化すべく、2015（平成 27）年度から「知の拠点（COC+事業）」に取り組んでいる。ちなみに、COC とは、センター オブ コミュニティの頭文字であり、地方・地域の知の拠点としての役割を大学が担おうとするものである。そして COC+とは、COC の含意を持ちつつ、地方創生が国策として打ち出されるなか、学生の地方定着をも目指そうとする取組といえる。

これを受けて、本学では、学生の地元への興味・関心を醸成するため、「あきた地域学課程」の新設など教育カリキュラムの改善と、学生の就職活動の促進のため、インターンシップ体制などの充実を鋭意進めている。

本稿では、秋田県立大学の「あきた地域学課程」の概要を示すとともに、その課程の中の、「あきた

地域学」という新設科目の内容について、システム科学技術学部と生物資源科学部の取組を検討するものである。

### あきた地域学課程の概要

まず、2015（平成 27）年度から 2016（平成 28）年度にかけて「あきた地域学課程」について、制度設計をおこなってきた。そして、2017（平成 29）年度から、「あきた地域学」という全学必修の新設科目をスタートさせており、この新設科目を受け

た後に、2 年次以降に、地域に関係する科目群からの必修・選択にて所定の単位をとること等により、地域創生推進士(仮称)の認証を授与する教育システムである。

本学は、理系大学であり、高度な実験室・研究室教育を特徴とするものであるが、それに加えて、キャンパスを飛び出し、具体的な地域課題に触れ、その対処方策を考察するという、地域に学ぶ教育システムをも整備しようとしている。地域の現場に赴き、住民や関係者の声に耳を傾け、地元企業の特徴的な妙技を目にする機会を提供し、秋田という地方社会に潜んでいる価値の発掘などを目指している。郷土ないしふるさとへの慈しみの心を育み、地域を悩ませている諸課題を析出し、地元において自分の果たしうる目標づくりや開拓する意欲などの醸成も視野に入れている。

また、教育プログラム（図 1）としては、初年次に全員必修のベーシック科目「あきた地域学」を学び（標準コース）、より深く学びたい学生向けに 2～3 年次には座学のあきた地域学選択科目群（6 科目 12 単位）と「あきた地域学アドバンスト」を配置し（上級コース）、さらに深く追求したい学生に対しては卒業研究や卒業論文で総仕上げを行う（エキスパートコース）を用意している。なお、地域の企業経営者と学生を繋ぐことを目指し、学生プレゼンテーションの審査体制を整備し、当該のコース修了認定書兼インターシップパスを共同運用という形での定着を構想している。

#### 1 年次必修科目「あきた地域学」

さて、本稿において報告する「あきた地域学」（全学必修）は、次のような教育目標を掲げている。まず、授業の目標をみれば、「私たちが暮らす秋田に目を向け、秋田の歴史、現状の基礎的事項を理解し、将来に向けた課題と今後の地域のあり方に対する視座を身につける」ものである。

そして、到達目標として 3 点を挙げている。第一に、秋田県内の地域特性と地元の人々を理解し、地域課題を考えるためのベースとなる知識と情報

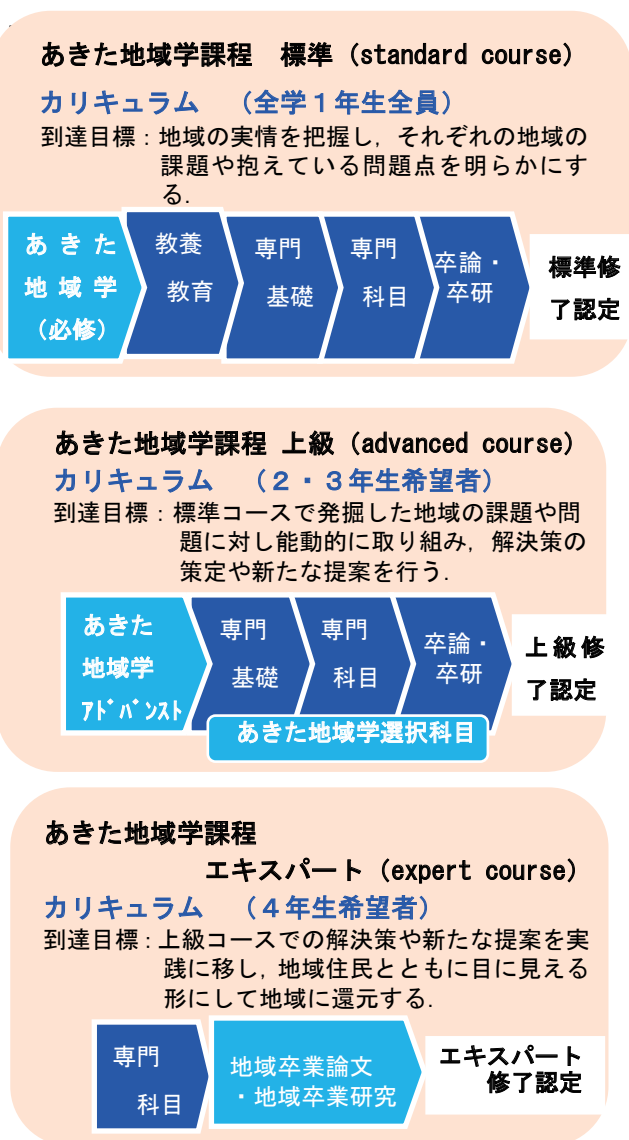


図 1 あきた地域学課程のカリキュラム

収集力を身につけること、第二に、上記第一で身に付けた知識や情報を活用し、地域の活性化のために必要な方策を構築できる能力を身につけること、そして第三に、上記第二で構築した方策を自分なりの考えで説明しプレゼンテーションできる技能を身につけることである。

以下に、システム科学技術学部と生物資源科学部の取組を報告し、最後に課題を検討する。

## システム科学技術学部における 「あきた地域学」の取組報告

### カリキュラムの全体構成

システム科学技術学部では、前半は外部講師を主とする座学中心、後半は実習実施と成果のまとめ・発表を中心に講義を進めた(表1)。

#### 表1 講義・実習のテーマ(システム科学技術学部)

第1回	ガイダンス(講義の趣旨説明)
第2回	実習オリエンテーション
第3回	秋田の経済 松淵秀和 所長(秋田経済研究所)
第4回	秋田の将来像 三浦廣巳 会頭(秋田県商工会議所)
第5回	秋田県の集落支援:由利本荘市の取組 小野一彦 副市長(由利本荘市)
第6回	秋田の社会 渡辺歩 政経部長(秋田魁新報社)
第7回	現地研修の事前準備(グループ分け, 内容の検討)
第8回	現地研修の事前準備(詳細検討)
第9-8回	現地研修(A:菜の花まつり) (B:自治体及びNPO実践)
第11回	小坂町におけるまちづくり実践 近藤肇 前観光産業課長(小坂町)
第12回	ポスター制作に向けたレクチャー, 製作
第13回	NHK大学セミナー水野千夏 社長(株せん)
第14-15回	ポスターセッション, 成果講評

### 特徴①：外部講師の活用

秋田地域を理解する上で基礎的事項となる部分について第3回「秋田の経済」、第4回「秋田の産

業」、第6回「秋田の社会」、第13回「秋田舞妓の取組」において生物資源科学部と同一の講義内容とし、その分野に詳しい外部講師による講義とした。また、由利本荘市について第5回「秋田県の集落支援、由利本荘市の地方創生の取組」、地域資源を活かした取組について第11回「小坂町におけるまちづくり実践」を、その事業に直接携わった行政職の外部講師による講義とした。

各分野で長年取組んだ事例に基づく内容で臨場感ある講義となり、聴講学生にとって地域理解が進んだ成果を生んだ(最終レポートより)。

### 特徴②：現地研修の実施

現地研修は、ボランティア実習の形式とし、自ら事前学習・準備を進め、実習当日は一人ひとりの学生が地域の人々と直接交流することを課した。

研修として、次の3つのコースを用意した。Aコース：菜の花祭り実習、Bコース：由利本荘市やNPO等がおこなう活動実習、Cコース：学生自らの企画である。以上の3コースによる実習の選択制とした結果、Aコース230人、Bコース12人となった。なお、Cコース選択学生はなかった。

#### Aコース：菜の花祭り実習

4学科の学生が混在することを基本に10人程度の単位で22のグループ編成をおこなった。2日間のうちのいずれか、かつ午前か午後のいずれかで実習をおこなった。作業は、「飲料等の販売」、「菜の花摘み体験の運営」、「協力金の依頼」、「BDFトラクター運行」、「着ぐるみによるPR」、「ふわふわ遊具の運営」、「案内、介助」、「場内管理」、「アンケート配付回収」とした。実習当日の残された時



図2 会場の様子





図3 車椅子の介助活動



図6 街の調査活動



図4 着ぐるみによるPR



図7 調査結果の整理

間は、来場者としての参加とした（図2～4）。

現地でのボランティア活動を通じて、鳥海高原の良さを実感するとともに、地域住民の優しさや学生に期待する眼差し、あるいは消極的だった自分が一步前に出ることができた等、学生は多くの気づきを得ている。

**Bコース：由利本荘市等での活動実習。**

もう一つのBコースでは、6つのボランティア実習を準備し、学生に選択を委ねた結果、由利本荘市主催の「町内点検」10人、若者会議主催の「まち歩き」1人、NPO主催の「ケア・カフェ」1人の実習となった（図5～7）。



図5 事前打ち合わせ

Aコースほどの実習の枠組（中心的イベントに基づく行動計画等）がないため、市役所職員や住

民・市民との打ち合わせが必要となり、却ってそのことでより緊密な交流が得られた。

また、地域の歴史や地域課題が議論の対象となるため、地域理解の深まったことがポスターや最終レポートからうかがわれた。

**本実習に参加した学生の成長度評価。**

Aコース及びBコースに参加した学生が、現場に出て、現場に関係する人々と交流するなかで、

社会人基礎力 能力要素	スコア		
	参加前	参加後	差
主体性	3.47	3.62	0.15
働きかけ力	3.51	3.72	0.21
実行力	3.71	3.87	0.16
課題発見	3.72	3.87	0.15
計画力	3.86	3.96	0.10
想像力	2.57	2.70	0.13
発信力	2.92	3.23	0.31
傾聴力	4.06	4.13	0.07
柔軟性	4.31	4.37	0.06
情報把握力	3.68	3.84	0.16
起立性	4.09	4.19	0.10
ストレスコントロール	3.53	3.71	0.18

n=286: ボランティア学生全体のデータであるが、地域学受講生が約8割を占めている。  
集計・分析: 金澤伸浩准教授

図8 学生の成長度評価

どのような成長が自覚できたのであろうか。この点につき、政府で使用されている「社会人基礎力」の諸項目を活用して、当該実習の事前・事後にアンケート調査を実施した。その結果を図 8 にまとめている。

「参加前」と「参加後」のスコアにみるように、いずれの 카테고리（能力要素）においてもプラスとなっている点を重視したい。とりわけ、「発信力」・「働きかけ力」については明確な向上がみられる。また、「ストレスコントロール」「情報把握力」「課題発見」「実行力」「主体性」等についても向上を示す数値となっている。

### 特徴③：ワークショップ（学生による協働作業） の実施

実習の成果は、「ボランティア目標」、「実施内容」、「ボランティアを通じて得たこと」の項目を基本にしてグループ内で討論し、ポスターにまとめた。14回、15回の連続の講義時間帯を使い、24グループの成果を2つのセッションに分け、ショートプレゼンとポスターを囲んでの意見交換をおこなった。セッションごとに、参加学生全員の投票により優秀賞を1つ選定した（図9）。



図9 ショートプレゼンの様子

これにより、自分たちの実習の振り返りと成果の整理にとどまらず、他グループの取組との比較において自分たちの成果の相対化も促された。

### 教育的効果に関する有効性と課題

#### （システム科学技術学部）

座学において、魅力的な外部講師の講義内容も

影響し、単なる感想にとどまるレポートではなく、自らが現地で調べ、そして出身県との比較をおこなう等して、秋田地域に対する考察が深められた。講義内容の理解の内面化が進んだと言えよう。

実習とポスター発表においては、事前準備の重要性、グループ内や来場者とのコミュニケーションの重要性の自覚、地域課題に対する理解・考察の深化が得られた。

また、すべての講義・実習を通してまとめる最終レポートの作成によって、秋田の経済、産業、社会、文化の座学学習と実習学習が結びつき、個々の学生から幾つかの気づきや今後の展望が示されて教育的な有効性が確認できた。

本科目の到達目標の一つである「地域の歴史、産業、文化の基礎的事項が説明できる」に対しては、座学と5回の個別レポートの作成により知識が内面化されており、おおむね達成できた。さらに、到達目標のもう一つである「特定の課題に対し解決の方向を自分なりの考えで説明できる」は、最終レポート作成の段階での考察を通して、程度の差はありつつも同じくほぼ達成できたといえる。

今後の課題は、実習における学生間の負担のアンバランスの解消、グループ内での実習に取り組む姿勢やポスター制作における貢献度に対する適正な評価方法の開発、ポスター発表が円滑かつより教育効果を伴うようにするための会場設定や時間管理等の改善である。

### 生物資源学部における 「あきた地域学」の取組報告

#### カリキュラムの全体構成

生物資源学部においては、システム科学技術学部と共通性を持ってカリキュラムを構成した。前半に外部講師による地域に関連する講義を配置し、後半には現地研修に関係する取組（地域情報の収集、フィールド・サーベイを置いている。そして、現地情報を踏まえたワークショップによる成果づくり（活性化ビジョンとプレゼンテーション）を用意し、本科目を進めた（表2）。

## 表2 講義・実習のテーマ (生物資源科学部)

第1回	ガイダンス(講義の趣旨説明)
第2回	秋田の将来像 三浦廣巳 会頭(秋田県商工会議所)
第3回	秋田の社会 渡辺歩 政治経済部長(秋田魁新報社)
第4回	秋田の経済 松淵秀和 所長(秋田経済研究所)
第5回	秋田の地域課題 地域学担当委員
第6回	美郷町の地域状況 松田知己 町長(美郷町)
第7回	三種町の地域状況 三浦正隆 町長(三種町)
第8回	現地研修のための討議 地域学担当委員
第9-12回	・美郷研修ラベンダー祭 美郷研修の教員団 ・三種研修じゅんさい等 三種研修の教員団
第13回	ワークショップ 地域学担当委員
第14回	NHK大学セミナー 水野千夏 社長(榊せん)
第15回	プレゼン/レポート作成

### 特徴①：外部講師の活用

「あきた地域学」の研究対象である「秋田」に関する諸情報を整理して理解させるため、第一線の知識人を招き、外部講師による講義を実施した。県商工会議所会頭からは「秋田の将来像」(第2回)を、県内主要新聞社からは「秋田の社会」(第3回)を、そして県シンクタンクからは「秋田の経済」(第4回)を、それぞれ講義いただいた。

また、現地研修に向けて、訪問地である2つの自治体の首長を招き、美郷町と三種町の特徴や課題について学修した。さらに、第13回には、NHK秋田からの申し出を受ける形で、システム科学技術学部との合同企画として、「秋田舞妓」の起業に挑戦した女性社長の講演を置いた(図10)。

第一級の講師陣による4回にわたる講義は、秋



図10 舞妓さんと講師

田県内におけるリアルな実態をそれぞれの分野からの確に切りとり、受講生の地域に関する興味・関心を引くものであった上、学生と比較的世代的に近い、若い女性の挑戦に関する講義は、程度の差はあれ、受講生に強い刺激を与えるものであった(受講レポートより)。

### 特徴②：現地研修の実施

生物資源科学部では、本学との連携協定を結んでいる県内の自治体のうち美郷町と三種町の2つを選んで、現地研修先とした。2地区とも土曜日の終日を費やす研修であるため、第9～12回の時間をあてがっている。両町役場の企画部署と打合せをおこないながら研修内容を定めた。

また、第5回と第6回の講義の折に、それぞれ首長に依頼して町の概況や課題に関する講義の提供を図った。これにより、受講生は事前の訪問先の情報を把握することができた。受講生の希望に沿いつつ按分して、それぞれの訪問地(美郷町83名、三種町80名)を決めた。

#### 美郷町における現地研修

4学科の学生が混在することを基本に、当初5～6名のグループ構成(15チーム)を考えたが、同行教員数の関係から10名程度の規模のグループ(8チーム)に編成せざるを得なかった。

美郷町では、到着時に美郷町役場の職員や地元ガイドの住民の、計12名程のメンバーと学生とが挨拶を交わし、スタートした。

まずはお昼までの時間、「街並み散策」をおこなった(図11～12)。美郷町の中心地である六郷地区の景観や情景を体感することを目的とし、グループ毎に自由に散策しながら、当該地区の魅力的な資源である、数多く存在する清水(シズ)を最低限5ヶ所巡り、寺町通りではお寺に関するクイズに答え、公的施設3ヶ所(ニテコサイダー工場のある「湧子ちゃん」、町の博物館である「学友館」、湧水の里の拠点施設である「水文館」)のうち、1つを訪れ、町の情報を収集するものであり、地元ガイドから説明を受けることになった(図13)。町の観光ツールとして整備しつつあるQRコードの





図 11 街並み探索



図 14 ラベンダー園の研修



図 12 チームで資源探し



図 15 ミズモと記念写真



図 13 地元ガイドの説明



図 16 ラベンダー摘み

スマホの読み取りが学生の興味を刺激した。

昼食については、「町内に点在する 10 ヶ所ほどの食事処にそれぞれのグループが立ち寄り、食する」という町役場からの提案に沿って実施した。お店や地域住民にとっては、学生来訪による賑わいを実感するとともに、学生にとっても自分好みのお店を探せることを狙いとした。

午後は、町の公民館で開催されている美郷カレッジを受講した。東京から来訪されている大学教授による「アロマセラピーと先端医療」がテーマであった。ラベンダーで知られる美郷町において「香り」への関心は町民の興味を引くものである。質問時には、本学の学生から複数の的確な質問が投げかけられ、会場を盛り上げた。

最後に、ラベンダー園に移り、町のマスコットであるミズモと一緒に摘み取り体験をおこなった(図 14~16)。

美郷町研修への参加学生の評価を表 3 からみれば、「地域を知ることになったか?」、「学ぶべきものがあったか?」、「住民交流は有意義であったか?」との問いかけに対してそれぞれ「たいへん良い」と「まあ良い」をあわせた肯定的な意見は、92.7%、92.7%、そして 80.5%と、大半を占めている。

なお、否定的な回答も若干存在する。これは、各グループの規模(10名程度)が大きかったため、聞き取りや体験がある程度可能であるが、食事処、や各地への訪問に手間取るという問題が発生し-

**表3 研修後の学生評価 (美郷町) n=82**

Q1 「地域を知る」機会となったか？		
・たいへんそうであった	45	(54.9%)
・まあそうであった	31	(37.8%)
・あまりそうでなかった	6	(6.1%)
・まったくそうでなかった	1	(1.2%)
Q2 学ぶべきものがあったか？		
・たいへんあった	30	(36.6%)
・まああった	46	(56.1%)
・あまりなかった	5	(6.1%)
・まったくなかった	1	(1.2%)
Q3 住民との交流は有意義であったか？		
・たいへん有意義であった	19	(23.2%)
・まあ有意義であった	47	(57.3%)
・あまり有意義でなかった	14	(17.1%)
・まったく有意義でなかった	2	(2.4%)

部に当初計画が遂行できなかったことに起因するものであることが、事後の学生との話し合いの中で明らかになった。

### 三種町における現地研修

三種町研修は、「じゅんさい体験」と「メロン体験」によって構成される。三種町は、日本におけるじゅんさい栽培の拠点であり、県内の主要なメロン産地であることから、選定された。三種町に到着の後、午前中にそれぞれ圃場に出かけてそれらを体験し、午後に町役場に戻り、農家及び町役場職員との交流をおこなうという行程である。

「じゅんさい体験」については、学生の受入規模の関係から、学生 20 名程度が 2 つのじゅんさい農家に分かれて体験することになった。「メロン体験」も同様に 2 つの農家を訪問し、栽培状況などの把握に努めた。

じゅんさいの摘み取り体験とは、小さな小舟をじゅんさい沼に浮かべて、水面下に育っている若芽を摘み取るものである。案内役の農家の指導を得るのであるが、学生のほとんどが初めての体験であり、不安定な小舟に乗り込むことさえ、難しい。大きな、黄色い声を上げつつ、初めての体験



図 17 じゅんさい摘み



図 18 採れたよ！



図 19 住民との語らい

を楽しんでいた (図 17~19)。

実際に、水に手を浸け、水温を感じ、水中に目を落とし、湖底から伸びるじゅんさいの茎のいくつかの枝に生じている若芽を見つけ出すことの苦労を経験する、爪先でその芽を千切るに際してもじゅんさいのヌメリが邪魔をして容易でない。高齢女性が小舟に乗って摘み取りをおこなっているじゅんさい農業の大変さと面白さを始めて実感することになる。収穫後には、じゅんさいを大きさ毎に調整し、場合によっては加工作業をおこない、パッケージングの後、出荷の運びとなる。このような全体工程をイメージできるようになる。

もう一つの「メロン体験」は、次のようであった。三種町は砂地を活用した、県下最大のメロン産地である。ただ、バブル期を最盛期として、現





図 20 メロン農家訪問



図 21 ハウス内の様子



図 22 体験終了後、町長説明

在は担い手農家の高齢化により、規模は減少してきている。

このような中であって、今回の研修では、代表的な2つの農家を選定した(図20)。一つの農家を高級メロン栽培の道を選び、もう一つの農家は既存品種であるが高品質化を目指し、かつ直接販売のできる顧客確保の道を選んでいる。

高級メロン栽培を目指す農家は、品種の選定への拘りに加え、ハウス内で、圃場に果実を触れさせない工夫(吊り下げ)を施している(図21)。そして、郵パックと連携して、贈答品としての販売チャネルを開拓している。高品質メロン農家では、既存の品種を使い、ハウス内の圃場に栽培する慣行的な農業であるが、絶え間なく、水の管理をおこなない、圃場の土壌成分を分析し、メロンの生育

環境の整備に努めているという特徴が見出される。学生によって、このような農家との直接的な話し合いは、生産者の拘りや見通し、栽培に対する誇りを感じると好機となっていた。

午前中の2つの農作物に関する訪問研修の後、役場近くの改善センターに集まって昼食をとった。地産地消をテーマとした地元母さんたちによる弁当で昼食をとった。そして、午後には町長からの現地解説を受けている(図22)。ささやかな体験を背景にして、三種町の将来展望に関するワークショップをおこなっている。

表4 研修後の学生評価(三種町) n=78

質問	回答	件数	割合
Q1 「地域を知る」機会となったか?	・たいへんそうであった	63	(80.8%)
	・まあそうであった	14	(17.9%)
	・あまりそうでなかった	1	(1.2%)
	・まったくそうでなかった	0	(0.0%)
Q2 学ぶべきものがあつたか?	・たいへんあつた	59	(75.6%)
	・まああつた	19	(24.4%)
	・あまりなかつた	0	(0.0%)
	・まったくなかつた	0	(0.0%)
Q3 住民との交流は有意義であつたか?	・たいへん有意義であつた	63	(80.8%)
	・まあ有意義であつた	15	(19.2%)
	・あまり有意義でなかつた	0	(0.0%)
	・まったく有意義でなかつた	0	(0.0%)

三種町研修への参加学生の評価を次の表(表4)にみるように、「地域を知ることになったか?」への問いに対して、80.8%がたいへん評価できると回答している。「学ぶべきものがあつたか?」に問いに対しても、75.6%の高率を示し、「住民交流は有意義であつたか?」との問いに対して、80.8%の高い比率であつた。また、否定的な回答はゼロに近い。このことから、三種町研修は、研修内容が適正であり、参加学生に受け入れられたと判断できよう。

### 特徴③：ワークショップ（学生による協働作業） の実施

生物資源科学部では、一連の講義で学修したことを踏まえつつ、現地研修での見聞を基本に置いて、それぞれの地域の抱える課題を考察するとともに、地域の魅力を世間に知らしめるべく、ポスター制作をワークショップとして実施した（図 23）。



図 23 ポスター制作

第 13 回では、美郷町研修及び三種町研修の時の行動班（第 1 班から第 8 班）毎にポスターづくりワークショップをおこなった。利用可能な教室の数の問題から、一つの教室（一つの教員を配置）において 2 つの行動班が作業することになった。全体として 4 つの教室を用意した。制作時間は 60 分と短い時間であるが、研修において体感したことを思い出し、地域の魅力を見出し、ポスターとしての作図を試みた（図 24）。そして、時間内に、



図 24 プレゼンテーションの様子

教室毎に 2 つの作品の見比べをおこない、学生評価によって、教室代表の一作品を選定した。

これらの代表作品（美郷町が 2 作品、三種町が 2 作品）を第 15 回に持ち寄り、4 つの作品毎にプレゼン時間 15 分のポスター発表会を実施した。ポスターの出来具合、スピーチの出来具合、地域の魅力に関する掌握度などにより、地元への報告のた

めに、各第一位を選定した。

これにより、学生の経験した現地研修を振り返ること、諸成果をポスターの形で整理するという課題が達成された。また、他グループの作品との比較を通じて、どのようなテーマをどのような形状で他者に示すことが有効であるのか、どのようなスピーチが魅力的な響きとなるのか、などを感じることができた。

### 教育的効果に関する有効性と課題

#### （生物資源科学部）

本科目は、受講生に暮らしの拠点である地域に目を向けるべく、具体的に秋田県ないし県内地域への興味・関心を高めることを目指したものである。講義、現地研修、ワークショップ（学生による共同作業）という 3 つの局面での効果は、以下の通り。

まず講義をみれば、次のようである。地域課題に精通した外部講師を招き、秋田県の抱える現在の課題や関心を語っていただいた。「秋田の将来像」としては「環日本海としてのロシア貿易の将来性」を、「秋田の社会」に関しては「人口減少と選挙行動」を、「秋田の経済」については「県内の経済セクターの展開過程」を主要テーマとしていただいた。本学のような理系大学ではあまり馴染みのない講義内容であるが、秋田県に焦点が絞られ、講師陣の経験に基づく語り口によって、受講後レポートにみるように、学生の知的関心を大いに刺激するものであった。

現地研修については、美郷町と三種町に分かれて具体的な地域及び地域住民との接触を図った。両首長による事前講義によって、訪問先の情報をコンパクトに把握することができ、現地訪問に際して、人口減少や高齢化に悩みつつも、それらに立ち向かい、町独自に地域活性化の取組が展開されていることを直接知る好機となった。

本科目へのワークショップの配置により、次のような効果をあげることができた。地域に関する現場情報を仲間と一緒に整理することができ、かつ思い込みや独りよがりな理解を仲間とともに修

正することが可能になった。そして何よりも地域の魅力を伝えるためのポスターづくりワークショップは、収集した諸情報の整理にとどまらず、仲間との協働によって、一つの作品を作りあげる・成し遂げるといった経験を提供するものであった。

最後に、毎回の講義において課した受講後レポートや現地研修レポートをみれば、個々の学生から幾つかの気づきや今後の展望が示されて、それぞれの講義は多くの学生に内面化され、各課題に対して自分の意見を述べるができるようになってきている。十分な教育的有効性が確認できる。また、本科目の到達目標の一つである「特定の課題に対し解決の方向を自分なりの考えで説明できる」は、程度の差はありつつも同じく概ね達成できたといえる。

### 「あきた地域学」の教育的発展に向けて

2017（平成29）年度から開講した「あきた地域学」は、全学を対象とした必修科目であり、システム科学技術学部の学生約240名、生物資源科学部の学生約160名を対象としている。前節までの取組報告にみるように、一定の教育成果を得ることができたと評価できる。

ただ、今後の持続的な教育的発展を展望する場合、初年度運用における教訓や課題を掘り出し、その改善に向けた具体的な対策を講じなければならない。以下に、本科目の実施に際して直面した諸課題などにつき、簡単に整理しておこう。

第1に、外部講師の適正な活用についてである。基本的に、今年度の取組において外部講師は、受講生に大きな刺激を与えていることが受講後レポートにおいて明らかになった。やはり、現実社会でプロフェッショナルな仕事をされている方の実践経験や情熱は学生の心に沁み入るものがある。しかし、初年次学生に対してテクニカルな用語による解説（例えば、専門的な経済用語など）が見られ、理系学生には馴染みにくい面があったことが若干ながら当該レポートから指摘されてもいた。

科目全体を見渡したとき、外部講師の回数と現

地研修等とのバランスが次年度に向けた課題と考えられる。現地研修やワークショップの説明のための時間確保が容易でない点が担当教員団から指摘された。

第2に、現地研修については、本科目の重要な特徴であり、受講学生からの評価も高いものであった。今後、現地研修については、不可欠な要素として磨きをかけていきたい。

ただ、生物資源科学部の事例を例にとれば、一つの町に学生約80名を訪問させることは相当に難しい。現地での学生の制御、地元における受け入れ先の確保など、改善の課題が求められる。

美郷町のケースにおいて、学生評価・満足度（表3）が必ずしも高率を示していないのは、現地での学生チーム規模の大きさに起因している。例えば、昼食時の「自由なお店選び」は、学生数の多さから入店拒否をされる事態を招いた。現地における学生の行動計画について再検討せねばならない。

三種町のケースをみれば、前年度までの試行と比べて、研修内容は基本的に同じものであった。これにより、学生評価（表4）は高率を維持したが、他方、町役場サイドにおける住民動員の負担が相当にみられた点（これは美郷町役場においても同様）が今後の課題である。

システム科学技術学部の事例をみれば、「菜の花祭り」への参加に集中している。ボランティア的な取組も、地域現地研修の重要なテーマであることは間違いないけれど、住民ないし企業との交流が安定的にできる受入先の確保も求められる。生物資源科学部と同様、学生数に見合った、現地研修の受け入れ先の確保という大きな課題が横たわっているといえよう。

第3に、ワークショップ及びまとめに関する課題である。限られた時間であったが、予定していたワークショップ及びその取りまとめ等は実施でき、学生からの評価も高いものであった。

ただ、このワークショップ等の遂行には、圧倒的に時間が限定されていた点を指摘しなければならない。授業後アンケートによる学生からの好評価も、実は担当教員による努力（僅か時間である



にも拘らず、学生への制作意欲の喚起)に起因する側面もある。

〔平成 29 年 11 月 30 日受付  
平成 29 年 12 月 14 日受理〕

第4に、本科目における受講学生の関与程度に関する評価をどのようになすべきかという課題である。今回は、学生評価について、ただ参加したら「合格」というようなことはせず、4つの指標(①出席、②毎回のレポート、③現地研修時レポート、④ワークショップでの貢献度)に基づき、学生の理解度を確認しながら、評価をおこなった。基本的には、このような評価に問題はないと考える。

ただ、ワークショップ等においては個人評価が難しい面もある。例えば、①研修(実習)における学生間の負担のアンバランスの解消如何、②グループ内での実習への取り組み姿勢やポスター製作における貢献度に対する適正な評価の仕方などである。その他に、ポスター発表が円滑かつより教育効果を伴うようにするための会場設定や時間管理等の改善も考えねばならない。

最後に、新設の「あきた地域学」を担当した教員を記しておきたい。学生と地域社会を繋ぐという当該の新科目は、試行錯誤の繰り返しである。専門分野の研究に従事する教員が、この新たな挑戦に積極的にかかわり、学生への教育的効果について両学部で時間をかけて検討し、計画の具体化が図られたことにより、今年度は一定の成果をみる事ができた。担当された教員の方々に感謝したい。

システム科学技術学部の担当教員は、須知成光 准教授(機械)、間所洋和 准教授(機械)、本間道則 准教授(電子)、渡邊貫治 准教授(電子)、山口邦雄 教授(建築)、櫻井真人 助教(建築)、嶋崎真仁 准教授(経営)、金澤伸浩 准教授(経営)である。生物資源科学部の担当教員は、金田吉弘 教授(環境)、尾崎紀昭 准教授(応用)、伊藤俊彦 助教(応用)、藤田直子 教授(生産)、阿部誠 准教授(生産)、渡部岳陽 准教授(環境)、藤林恵 助教(環境)、荒樋豊 教授(アグリ)、酒井徹 准教授(アグリ)の、計 17 名である。

## An educational trial of a new subject called “the Akita area study” of Akita Prefectural University:

Toward the university that took root in the area

---

Yutaka Arahi<sup>1</sup>, Kunio Yamaguchi<sup>2</sup>

<sup>1</sup> *Department of Agribusiness, Faculty of Bio-resource Sciences, Akita Prefectural University*

<sup>2</sup> *Department of Architecture, Faculty of System Science and Technology, Akita Prefectural University*

This article introduces the “Akita Area Study” subject at Akita Prefectural University. In particular, the article records the 2017 activities of the newly established Akita Area Study required for all students and included in their core education. The educational aims of Akita Area Study are to promote attention to and interest in the area where students spend their daily lives and to raise students’ interest in the modern problems of their community. The subject takes three educational approaches. The first is lectures by outside experts well versed in community affairs, the second is student fieldwork in cooperation with local governments, and the third is an area promotion plan developed by students through a workshop. In 2017, implementation of this subject did promote students’ attention to and interest in the community, and it generally produced a positive educational effect. At the same time, implementation clarified problems that should be solved.

**Keywords:** Akita area study, Course of the Akita area study, Outside lecturer, Fieldwork, Workshop, COC+